

橋本左内についての覚書き

——その蘭語学習の方法と訳文について——

杉 本 つ と む

はじめに 昨春秋、広島・大阪・福井・金沢と蘭学関係の資料を探訪する機会をえました。中で福井駅で汽車待つ時間を景岳橋本左内の墓参にあてることができました。そしてはからずもある種のヒントをえ、帰京して二、三調査し勤王の志士としての橋本左内を蘭学の徒としての左内としてみなおすこととしました。ここに つづる覚書きは、橋本左内という天才的蘭語学者のあり方を考察し、あわせてかつて「国文学研究25」誌上に発表した八近代語の標章—デアル体の発生と展開—Vを補足し、蘭語学々習の態度方法への考察をおこなったものです。

左内の蘭学 蘭学者としての橋本左内について特に論じたものはみあたらずに、たゞ浦上五六氏がその著「遺塾の人々」(昭和十九年)の中の八第四章 左内を繞つてV(一八一—二二八)という章題で考察しているのが目につきます。しかし左内の蘭学特に蘭語学についてはやはり深い考察をすすめてはいません^{註1}。小論では従来の先賢のご研究をもとに、まず左内の学統について、できる限り明確にしておきたいと思ひます。その前に明治八年五月正二位源慶永の撰になる橋本左内小伝のうちから、志士と

してでなく、蘭学者として説明されている部分を抜萃して参考にしたと思ひます。

橋本左内小伝

家臣橋本左内名綱紀。字伯綱。号黎園。後取鈴屋翁国風意。自称桜花晴暉樓。天保五年甲午三月十一日生於福井治下常磐街。父名長綱。称彦也。以医為業。母箕浦大行寺僧某之女也。綱紀為人。警敏。卯重好学。從藩儒吉田梯藏講習經史。及長慷慨有大志。器識過絶人。而溫粹謙和。未曾與人相爭。年甫十六。慨然曰身學僻鄉。未免坎哇之見。不若就大都名家而朗發智識也。嘉永二年巳酉。秋負笈游浪華。從緒方某学西洋医術。四年辛亥。聞父疾。五年壬子十月。父没。十一月。綱紀襲業。列医員。安政元年甲寅二月至江戸。入杉田成卿之門。成卿付洋書一部習讀。綱紀日夜研究。孜孜不怠。僅以一月卒業。成卿驚其才敏。試舉其書以問之。弁論如流。無有一謬誤。乃嘆曰能繼我業者必此人矣。二年乙卯七月。歸国。是冬免医員再至江戸。留学藩邸。三年丙辰春。歸国。会藩新興文武学塾。特以綱紀充幹事。先是福井学派率倚崎門。人皆談空理。無益於世道。綱紀憂之。

好論善導。務剷除其弊。學風大變。四年七月、召綱紀於江戸。命侍読兼参与柘務焉。自嘉永中亞細使節彼理來要通信。天下多事。物情騷然（後略）

右小伝で大切な点は、年十六才、嘉永二年（一八四九）に大阪に出、翌年緒方某（洪庵）について西洋医学を学んだということです。ですから、十七才・十八才と二年間、適塾にいたわけですから、これは「姓名録 天保十五年甲辰孟春自始 適々斎」とある緒方洪庵の塾すなわち適塾の入門帳によつても証することができます。すなわち同姓名名録（嘉永第三晚春入門 越州福井藩 橋本左内Vがそれです。小伝では嘉永二年浪華に遊學となつていて、姓名録と異なる。これは、「濟世館小史」に「嘉永二年十月十六日解職 頭之部 督務妻木敬齋 主解橋本左内岩佐又玄 助刀花木定吉外二名Vと解剖に加わつてゐる記事から推して、おそらく大阪に出たのは二年（晩秋か、初冬のころ。年がおしせまつてでしよう）でも、適塾入門は翌年の春ということになつたのでしよう。橋本景岳全集の年譜に嘉永二年秋のころに適塾入門としているのは誤りでしよう。元來聡明な左内が、もつとも知識欲の盛んな、頭腦のやわらかい十七八才の時に適塾でオランダ語を学んだことは、語學學習上でも実力養成に完璧を期することができたと思われまゝ。小伝に杉田成卿の門に入り、成卿をして「我業ヲ継グ者必此ノ人矣V」といひしめたのが、明々白々に左内の実力を証しているといえましよう。

適塾にあつて、左内は「扶氏經驗遺訓」「病氣通論」「ローセ氏 人身究理書」「イスホルシング氏理學書」など、原書訳書を書

写し読破し、洪庵にも「池中の蛟龍Vと賛えられたといひます。たゞし、浦上五六氏が著書に引用されている嘉永四年七月八日付の書簡は彼の語學力を考えるうえに重要なものと思われまゝ。再録させていたゞきますとつぎのようなものです（左内の適塾での勉學ぶりが同郷人から知らされたことに關して）。

小生近來原書進候由是ハ没谷（友入）潤色と奉存候。自分心ニハ甚驚鈍嘆居候。漸く先日ハ文法書終業致、是の頃昆斯相始候。獨見ニて腹稿致候上ニて講釈相順候。誠に不堪眩暈候。

ハ文法書終業Vとあるからは、私の推定ではおそらく緒方洪庵が江戸の坪井信道の塾で学んだと同じものをテキストとして學習したのでしよう。手紙は多少とも自己の力を謙遜して表現していると解してよいと思ひます。嘉永五年に帰郷して父に代る診療において梅毒患者の局部切斷術を施しているほどで、父もわが子ながら感嘆しているのです。適塾での語學も實際はかなり左内の身についたと推測してよからうと思ひます。

左内と語學力 ここで書簡にあらわれた左内の語學力などについていくらか私見を示しておきたいと思ひます。特に嘉永四年六月五日（同年十二月二十二日までの書簡（すべて笠原良策宛）在福井となつてゐます）が重要となりましよう。順次紹介していきます。

①六月五日（前略）御手帖相達忝致。拝読一候。時下暑氣弥増処、愈御清榮被。成。御起居。奉。賀候。就ハ被。仰越。一候扶。夫子遺訓之義早く相知らべ候処、今暫之処筆者手塞り居候故、本月十日頃より可。相始。由申居候。尤も貴旨之通り、迎も一

知半解之原書説は不_レ宜と被_レ存候故、少し説め候者に御頼み申、其中ニても力ハ少_ク劣候ともに綿密なる人可_レ宜と存じ候故、綿密底之人ニ相頼み申候。無_レ程為_ニ相写_一逐々可_レ呈玉几下。屈指御待可被下候。右写させハ獨にて緩々為_ニ致可_一申哉、又ハ兩人程相頼み可_レ申哉、余り多勢相頼み候と、先を競候やふ相成候故、反て可_レ惡率_一存候。為_ニ写方ハ貴旨之通り筆料等ハ筆者と相談之上後便可_一申上_一候。尤も表向洪庵方え御頼不被下とも、写取候事容易く出来申候。別ニ御頼み被_レ成候ハト蛇足と被_レ存候。(後略)

*書中の扶夫子遺訓は、適塾のバイブルともいふべき「扶氏經驗遺訓」(安政四年板行にされている)で、同書の凡例Vにハ一此書ハ彼邦紀元一千八百三十六年^{天保七年}李^{天保}滿^李生^李各^李地^李醫^李官^李扶^李歐^李蘭^李士^李著^李ハス所ニノ五十年經驗遺訓ト題セリ而_レノ一千八百三十八年^{天保九年}和蘭醫官華^{天保}傑^{天保}滿^{天保}其國語ニ訳セシ所ノ者ナリ扶氏自序ニ曰ク予病ヲ療シ人ヲ教ル者茲ニ五十年殆ント生ヲ醫トニ終レリ故ニ諸病ノ治法學問ノ次第共ニ其要領ヲ發明セル者少シトセス則チ今之ヲ集録ノ身後ニ遺シ亦將ニ以テ後學ヲ教訓セントスト蓋シ此書ノ旨趣ニノ題名ノ由テ出シ所ナリ(後略)Vとみえます。震動雷天侯の草稿などをみてもわかりますが、適塾では本書を翻訳技術修得のテキストとして利用したわけです。板行の如何に関係なく、原文に対して洪庵の訳之を示しておき各自それを参考にしつつ、訳法を学んだようです。たゞ書簡では左内の語学力は確かめられませんが、これは笠原良策から左内に対して書写のことを依頼したのですが、ハ少し説め候者Vとか、

ハ綿密なる人Vというのは、翻訳力についていつていると思います。とすると左内が自身で翻訳するを得ないので、ハ綿密底之人ニ相頼み申候Vとなつたのでしよう。もう一つは純粹に書写するということです。塾生の中には両者を兼ねてアルバイトをしたものもいたし、どちらか一方の者もいたでしよう。天侯の書き残したものにハ十五葉ノ下條中ノIk mean hier niet de weerdijk armen エリ第二ノ上テレノレヲ訳ス但シ貧民已ニ其貧ヲ明告スル者ハ……Vといったものがあります(洪庵翻訳の「扶氏經驗遺訓」と全く同訳文)。これが翻訳のみを頼まれたかどうか判定しかねますが(この場合、天侯は入門してわずか一年ほどにすぎません)が、いづれにしても師と弟子とが翻訳文をおしても一体であることがわかりましたし、忠実に師の翻訳を襲うことが、翻訳技術の第一歩であつたことが推定できます(アルバイトとして翻訳をし、訳料をとつていた記録もみえる)。さらに六月十一日の書面ではハ就ハ先日より御頼之原書段ニ御申越之旨、委ニ筆工ニ申付け、既三四日以前より写し懸り申候(中略)十月中ニハ皆ハ出来可_レ申候Vとあつて、筆工が示されています。依然として左内の力は語られています。こうした中でハ七月八日Vの書簡があらわれます。ここで左内はハ宮永氏原書落字有之旨気毒_一申しわけ_一筆者註_一之至ニ御座候。今度差上候扶氏書ハ決て誤脱可無之と被_レ察候。文字も随分立波塾中にて一二之書手ニ御座候。(中略)尤も扶氏書大成十月迄と御思召可_レ被_レ下候。其々還ハ不_レ相成_一候。(後略)Vとあつて、原書を専門に写している者のいたことがわ

かります。そしてこの書簡の追伸の部に本文にあげた左内自身の語学力がはじめて語られているのです。すなわち原書読解が進み、文法の初歩も終了、翻訳も試みているというわけです。

②七月十八・二十日 この書簡で、ハ国許（福井）蘭学之盛なる事とかハ昨年市川斎宮〔学が国でドイツ語〕国許に参り居、原書学教授致居候処、当秋東武龍越候。Vとか福井の蘭学を示す記事が目につく。そしてハ良策氏〔左内の書〕も近來篤志ニて原書学致し候故、旁以、原書読一人拓度曾兼て小生方え頼み有候折節、飯田兄漫遊之御念も有、之由承及候故、幸之事と存じ、比行可、被、成哉相尋候処……Vなどがみえます。さらに重要なことはハ再白〔追伸と〕Vのところにもえるつぎの記事です。従来研究家はこれにふれませんが、一考の価値あると思えます。

○再白 時下折角御自愛奉、遙祈一候。扶夫子遺訓近來ハ百枚計出来候。乍、去校読未、訖申、且ハ幸便と申も無、之、不計延引相成候得ハ（後略。傍点筆者）

校読未ダ訖り申サズというのはおそらく左内の校読のことでしよう。とすると前便で郷里の渋谷某が左内の原書読みを良策に耳うちしたこと―左内の語学力―をハ渋谷の潤色Vとしながら、わずか十日後には校読と言っているのは、逆に渋谷の言の真を示すことになるでしょうし、左内の謙遜となりましょう。これをさらに実証するように、つぎの九月十三日の追伸の部に

○時下御自愛所仰候。遺訓校読一度致候得共、定て謬誤間と可

有之候間、若御不審有之候時ハ、幾葉第行と御書し、前後之文一二行程御記し御遣可、被、成候。小拙早々原書と再校可致候。以上。

*右は左内の語学力を証するものとして部分的に引用されていますが、確かに貴重な文面です。しかしこれをもつて左内の語学力が天才的と早計してはなりません。何故なら校読の際、原書と他人の訳文と模範訳文（洪庵のもの）とがあつたのですから。しかしこのへんで左内はどうやら蘭学者のはしくれとなつたわけで、いわば蘭学者としての橋本左内がここに誕生したといえます。

さて一おうこの笠原良策と「扶氏経験遺訓」についてのいきさつの終局を示しておきましょう。

③十二月二十二日 十一月十九日御認之御書到着忝拜見仕候。時下嚴寒之節相成候処、先以慇御安米被、成、御勤務一奏賀候。就ハ今度平野氏帰郷被、致候ニ付、扶夫子遺訓御落手被成、先々御思召ニ相叶、小拙之素懐相違奉、同喜一候。就てハ次巻之義も同筆ニて御懇望之由、依て筆工え色々相談仕候得共、兎角筆工承知致し兼申候。依、是更筆者一人見立相頼申候。此人ハ当節熟ニての筆者故、写本被、頗甚沢山ニて少し手間取、日月ハ遅延可、致候得共、書之義ハ必ず前巻々格別下り申間敷被、存候。毎々御約定ニ違、小拙甚御気毒ニ存候。写料之処ハ、前筆者同様、併校読ハ致し呉不申候、且亦小拙来春ハ帰郷仕候故、其節迄ニ悉皆相済候様致度心底ニ罷在候得共、今少し遅引可、仕存候。左様相成候得ハ御賢息建藏君え後事相記し置可、

申、左様御承知置可、被、下候。

なお以下緒方洪庵のもとを去つてからの書簡をとおして左内の語学方面についてさらに考えておきましよう。いうまでもなく安政元年三月（五八）の江戸遊学時代になります。

a 安政元年六月十日、半井仲庵より笠原良策へ（前略）一橋本子々来書中頼来候エンゲランド字書、いよく江戸表へ相廻候而御指支之儀無、之候ハゞ、何卒よろしく御聆旋可被下奉、願候（後略）* 左内が英語に目をむけていることがわかります。

b 安政三年二月十九日、杉田成卿より市川斎宮へ

（前略）同人より預り置候書物箱内、海砲並山陽詩文等、為、災鳥有となり、何とも無申訳奉存候。御序に宜御託被下度奉、希候。且又同人より借居候英辞書編方へ又貸し致、拙家之災を免れ、至幸と奉、存候ニ付（後略）

（前略）済生三方此度再刻仕度、右ニ付同書之内誤之個所改申度被、存候処、兼て之蔵本へ書入置候ものは烏有となり候に付、橋本子心付も御座候処加筆致し呉候様、何とも御面倒奉、存候得共宜御頼被、下度奉、希候。即一本相添差出申候。

但私覺居候分は加来仕候得共、自余之処忘却仕候に付相頼申度奉、存候事。

* 杉田が左内からaの書簡中にみえる英語字書（英蘭辞典でしよう）を借用していたこと。および杉田が市川斎宮をつうじて、自分の訳した「済生三方」の再版にあたり、その校訛と訂正を左内に依頼しています。このことは左内の語学力、信頼度を語るものとして大切です。特に杉田成卿からです。つき

のcはさらにこの事実を当人同士のものとして確認できるようです。

c 安政三年四月二日 杉田成卿より先生へ

東君勿々過去、又新緑之候と相成申候。愈御健安御研究拜賀之至奉、存候。先日は御貢来被、下、其節は何寄之商品為、御見舞、蒙、御恵、難、有、乍、去毎時御厚恵に預候而已に而無寸効、痛縮の至奉、存候。爾後市川を以て済生三方御校訛之義奉、願候ひしか、未御披閱不、被、下候哉、再刻ニ為、取掛申度奉、存候間、若御点閱相済居候処も御座候は、一巻にても拝受仕度奉、存候。右相願度如、此御座候。頓首。

四月二日

杉田成卿

橋本左内様

二啓、先日ハ好こそ御貢来被、下候処、例病中失敬のみ、呉々も恐入候。万拜届に可、奉、謝候。不尽。

* 右の記事を「安政丙辰（三）日記」からも求めることができます。すなわち同年三月二日の記事の終りに短かいのですが、ハ杉田より来状三方之校訛を促す、同月八日の記事にもハ三方校訛とみえます。ハ杉田Vと呼びすてにてある点も注意されます。

d 安政三年四月九日 先生より中根雷江へ（前略）先便良策より来状「リユジメント」の事種々申遣候。執事も御同意之様ニ申来り候得共、此義ハ小拙甚不同心ニ御座候。凡物ヲ為スニハ時勢人情ト申者ヲ斟酌致サ候ワデハ、百事成就致し不、申、當時ノ勢ニテハ中々文典ナド上板等ノサワギドコロニテハナシ。

此節右等之事致候は、恰も小児聲未タいろはヲ習ひ不・申中ニ無点の四書ヲ望候と同様也。夫よりは折角自分いろは之世話致し、篤志苦学之門弟ヲ仕立候方第一タルベシ。(後略)

*左内の警告にもかかわらず、この「リユジメンタ」は結局「和蘭語学原始」の日本名で復刻出版されました(左内の翌日の書簡でわかります)。そして、安政丙辰(三)日記の四月四日には八(前略)笠原より来状文法原始一冊添、(後略)とみえます。日付からいくとやや矛盾しています。四月十日付の書簡にも左内が「リユジメンタ」出版の相談をうけたことに關して、重ねて八桂山兄御書中ニ有・之候参考一案ハ小拙迎も其任ニ当り難く候間、御断申上候。参考人と申人ハ精密明決之能相備候者ニテ無之候而は出来不申、事之両技相備候人世間希有と見へ、何方之板ニも誤彫多々有之候。小拙輩之暗愚疎劣中々及び候所にては無御座候間、堅く御断申上候とみえます。りつばな態度です。たゞ左内が福井藩の洋学においてどのような位置にあつたか、あるいは左内の語学学習観というものが語られていて興味もたれます。藩から相談を受けられるという点先輩として取り扱われているわけです。さらに注目しておいいことは左内の語学とは直接關係がありませんが、このころから左内のいわゆる八憂国愴君ト申病(四月九日付書面)がでてきたことです。蘭学者から志士へ転向する姿勢がこの時期に明確にうち出されてきたことを認識すべきでしょう。蘭学・洋学への批判もでてくるのです。

*「リユジメンタ」という文典は静岡県立中央図書館奏文庫蔵

本のつぎのものと同様と思われます。

• Rudimenta, of gronden der Nederduische taal. 1 stukje

Sde uitgave. Leiden, 1846

2 stukje

3de uitgave. „ 1819

*ただし「和蘭語学原始」は写真でみると八千八百四十四年とみえますから八1 stukjeの初版に近いものだと思います。

(追註)

左内と成卿 さて、つぎに小伝にみえる安政元年二月の出府と杉田成卿への入門について考えておきましょう。安政元年は二十一才の時にあたりますが、はじめは緒方洪庵の關係で洪庵の師・坪井信道の關係者・坪井信良の塾に遊びさらに信良の紹介で成卿の門にはいつたのが本筋と思われまゝ。当時嚴密な蘭文翻譯家として名の知れている成卿に太鼓判をおされたのですから、左内の実力がいかに適塾で磨かれたか、また高く評価されたかがわかります。安政二年七月二十日付、杉田梅里先生より江戸留学の先生への書なる手紙を読むと、両者の緊密度もうかがわれます。書籍の貸借や学問(化学)上の質疑応答はもとより八御國産珍品両種、難有拜味可仕候……など、左内と成卿の交渉のさまが想像できるのです。上述のように成卿が「済生三方」の再刻について校訂を左内に依頼したというのも肯定することができましよう。というわけでつぎに左内の学統を图示してみたいと思います。なるべく關係者を添え書きしてみましよう。

左内は確かに天才的な人物であつたかもしれませんが、江戸へ出てすぐに成卿に実力を認められたということは、何としても適

(大槻玄沢)

策作 阮甫

(馬場 佐十郎(語学))

(シーボルトの弟子)
大庭雪齋

長崎通詞(語学)

稻村三伯—中 天游

宇田川 玄真

(榛齋)

坪井 信道

坪 緒

(戸塚 静海)

橋本 左内

(シーボルトの弟子)
市川 齋宮

宇田川 榕庵

杉田 成卿

(馬場 佐十郎(語学))
(吉雄 権之助)

* () ・ () は直接関係のない人物

塾での蘭学修業が基礎になっているといつてよからうと思ひます。とすると、左内の学風を解する上で、洪庵の方法、態度を吟味してみることが大切になると思ひます。

左内と洪庵 これについて浦上五六氏はこう述べておられます。

ところでも一つ左内に与へた洪庵の影響ともいへるものを伝へると、それは講学の方法についてである。左内は江戸にゐる間、同藩書を監督し時に蘭書を講じたが、その講義は一字一句の字義を究めて教へるといふよりも一句一章の意義に通じさせるのを主意とした。書に就まれて学理と實際とを分つ講学法を排斥し、書を読み学問を實物に附属したものと考へる扱ひ方をした。当時蘭書の翻訳に原文の一字一句を苟くも扱はず忠実

に近いかはつぎの例でも証明できます。

④ 福沢諭吉が「福沢全集緒言」で述べているつぎのこと。四十余年余は大阪の大学医緒方洪庵先生の門に在り(○安政二年三月の入門)、先生の平生、温厚篤実、客に接するにも門生を率ゐるにも諄々として応待倦まず。(中略) 扱大阪を措て江戸の方には蘭学を以て門戸を張るもの甚だ多くして、其中最も有名なるは杉田成卿先生なり。此人は真実無垢の学者にして其蘭書

を翻訳するには、用意周到一字一句を苟くもせず、原文の儘に翻訳する流儀なれば文句文章極度高尚にして俗臭を脱し、一寸手に執りて読み下したるのみにては容易に解す可らず、熟読幾回趣味津々として尽きざるの名文にして、此先生の世に出したる訳書も亦渺ならず、以上二先生は東西学問の両大関にして名望學識共相下らず。おの／＼得意はありながら、其翻訳の風に至ては徹頭徹尾正反對にして、緒方先生は前にも云ふ如く、一向字句に構はず、荷蘭の文法を明にして其難文を解釈するは最も得意なれども、翻訳の一段に至れば、原書を輕蔑して眼中に置かず、其持論に曰く、抑も翻訳は原書を読み得ぬ人の爲めにする業なり。然るに訳書中無用の難文字を臚列して一読再読尚ほ意味を解するに難きものあり。畢竟原書に拘泥して無理に漢文字を用ひんとするの罪にして、其極、訳書と原書と対照せざれば解す可からざるに至る。笑ふ可きの甚がしきものなり云々と、吾々門下生の毎に聞く所（後略）

余談のようですが、論吉の啓蒙學者としての平易な文章表現のスタイルは適塾で養われたものであり、むしろ適塾には論吉的な人物が右往左往していたということができるのです。たゞ左内の場合、医師の家に生まれ、十二才の時藩儒吉田東篁に經史を學んでおり、二十一才（安政元年）の出府においても、漢學を塩谷宕陰に學んでいるなど、漢學の素養もかなりつんでいたことは看過できません。杉田成卿との交際でもそのことあることが、大いなる力となつたのでありましょう。

緒方洪庵とその蘭學の方法・態度について、もう少しふれてお

きましよう。それは洪庵が「病學通論」

（天保五年起稿、天保十五年完成）

（嘉永二年四月出版、全三卷刊行）

の訳稿を坪井信道に示して校閲を得た時、信道は八乍失敬文辞の上は御地にて医事相心得候儒家へなりとも篇と御相談可然奉存候。小子草々心付候文は申上候へども、多忙中中々十が一と奉存候。世間真実の人は稀なるものにて、文面よろしく候へば、是はと感服いたし、文面不行届に候へば真実に不拘妄誹謗する輩多く困却仕候。小子ならでは大兄へ簡様申上候もの是有之間敷奉存候。江海之量幸に不敬を恕せよと忠告していることです。要するに漢學者からみれば、俗の俗なるものと非難される性格の文章——うらがえすと通俗——である点を信道が心配したわけです。これは同書の△題言Vでつぎのように洪庵が述べている気持ちと表裏一体の態度でしよう。すなわち、

②或云。此編意義通達論理精密ヲ尽セリト謂ベシ。惜哉。文字鄙俗ニシテ理雅ナラス。恰モ美談ヲ馬槽ニ盛レルカ如シ。人顧

ル者アル事渺カラン。蓋シ此舉ハ所謂病學ノ嚆矢ナリ。一ダヒ世ニ布カバ、天下後世必ス軌範ヲ之レニ資ラン。実ニ凡庸ノ事業ニアラス。願クハ子意ヲ事物ノ名称等ニ注ヒテ再三之レニ改正ヲ加ヘヨ。章云ク。然リ余モ亦嘗テ文字ヲ正シ、章句ヲ明ニシ、法ヲ後世ニ垂ン事ヲ庶幾セリ。然レトモ余少フシテ西學ニ志シ、東西ニ奔走シテ、文ヲ學フノ余暇ヲ得ズ。卑拙淺陋悔エトモ及バズ。以爲ラク。遺芳ノ備ラサランヨリハ寧ロ臆ヲ伝ヘザル者勝レリト。將サニ此稿ヲ擲テ筐中ニ投シ、終歲顧ルコト亡ラントス。比々四方有志ノ士、余カ此舉アルヲ聞テ其公行ノ遅キヲ責ムル者多ク、或ハ之レヲ請テ止サル事饒渴ノ飲食ヲ望

ムカ如キ者アリ。斯ニ於テ復タ遺命ノ遲遲ス可ラサル事ヲ念
ヒ、其卑陋ヲ省ミス、遂ニ梓シテ以テ後ノ君子ヲ俟ツノミ（後
略）

緒方洪庵の教養についてはあえてこゝに説きません。三十三侯
四人扶持の八中小姓本格Vの父をもち、生来多病で勉強も思う
にまかせず、士になることを断念したのが洪庵ですから十七才
（文政九年）で中天游の門にはいつて蘭学を勉強しようとするまで、学
者として漢学修業はすくなかつたことは推定されます。しかし福
沢諭吉によつて、いみじくも代弁されるように、それまでの学者
とちがつて、はじめて真に啓蒙学者としての態度と方法をうち出
したのが洪庵であつたということが出来ます。しかも洪庵は、幕
府直轄の医学校ともいふべき八西洋医学所（医学所と改称）Vの
頭取りとして、日本医学界の主流、中心座標に位置をしめた人物
です。医学所は周知のように明治になつて政府の医学校となり、
現在の東京大学医学部と発展していつたのです。洪庵の重要性は
この一事でもわかるのです。おそらく洪庵が啓蒙学者として、漢
字とのきづなを断つ方向をもたなかつたならば、西洋近代医学を
近代日本に適應消化させる過渡的役割りは演じられなかつたでし
ようし、諭吉をはじめ他の多くの適塾門下生をつくりあげること
ができなかつたでしょう。洪庵は江戸から明治への一大転換期に
おいて大活躍をした偉大な啓蒙学者であり、教育者であることを
再認識しなければなりません。まさしく諭吉も洪庵あつてはじめ
て創作された人物であり、その方法態度に洪庵学の投影をいぢ
るしくみなければなりません。

しかし以上、洪庵について言及した方法態度は、実は洪庵自身
のものでなく、蘭学者全体、すくなくとも宇田川玄真らのつた
態度や方法でした。このへんの事情は、かつて東京女子大での学
術公開講演で八近代日本語の成立―洋学との関連において―Vとして発
表しましたので、それを参照していただきたいと思ひます。いう
ならば杉田玄白以来の蘭学者の示し努力した方向へのより強力な
推進者が緒方洪庵であるということが出来ます。蘭文をいかに
漢文に移しうるかではなくて、要は蘭文の真意をつかみ、いか
に日本語文に置き換えるかが重要なのです……。橋本左内はそう
した洪庵の深く希望をかけた前途有望な蘭学者であつたというこ
とです。

しかし私はここで一つ洪庵のために弁明したいことがあります。
それは「扶氏経験遺訓」（附録自一）で八蘇魯林水「コロル」
此名原来格魯林ト訳スヘキナリ先哲其音ヲ誤レリ然レトモ
耳目ノ慣ル、ヲ以テ之ヲ改メス旧訳ヲ變用ス下皆之ニ倣ヘVと註
を入れていたところです。これは見方によれば、洪庵が彼への非
難に対して報いた一矢といえまじよう。洪庵の強みはそれ故、私
個人の考えでは長崎行きにあると断じたいのです。文章の平易通
俗なこと、その形でなく実をとる方法態度はこの間に大いに養わ
れたと思ひます。「扶氏経験遺訓」がシーボルトの弟子であり、
長崎教育を受けた八西肥 大庭恣景徳Vの母校となつている点が
大切です。長崎でおそらく通詞と接したでしょうから、その蘭語
学習は中野柳圃や吉雄権之助の系統であることはほとんどまちが
いがないと思ひます（大庭の主張には、近代的な言語に学者として
の態度がうちだれています）。つぎに洪庵の弟子で適塾の逸才と

いわれた長与専斎の長崎での蘭学学習の感想を紹介しておきたい
と思います。専斎は長崎でボンベ（安政三年八月来日）の教育を受けまし
たが、それと関連してこう述べています。

④従前とは大なる相違にて、極めて平易なる言語即文章を以て直
ちに事実正味を説明し、文字章句の穿鑿の如きは毫も齒牙にか
くることなく、病症、薬物、器具其他種々の名物、記号等の
類、曾て冥搜暗索の中に幾多の日月を費したる疑義難題も物に
就き図に示し一目瞭然掌に指すが如くなれば、字書の如きはほ
とんど机上のかざり物に過ぎず……日々に新たなる事を知り新
たなる理を解し、復た一字一章の阻礙することなく坦々として
大道を履む（中略）此伝習の事より蘭学の大勢一変して摘句尋
章の旧習を脱し、直に文章の大意を領して専ら事物の実理を研
究するの目的に進み……前年緒方先生の蘭学の時節到来と宣ひ
しぞ寔に達人の知言なりし。

専斎は洪庵のすすめで長崎に行つたわけですが、師・洪庵の言
うところ至言と感じ入つたわけです（諭吉も長崎で蘭語学を習い
ました）。上の引用は一面または適塾の性格を語るものというこ
とができます。しかし適塾でさえ専斎の記録しているところでは、
ハ摘句尋章の学に過ぎざりしと感じていたのですから、なかなか
自由な翻訳態度は望まれなかつたのです。

適塾での蘭語学習 さて、さらにここで左内が適塾でどのような
学習をしたかを知る上から二つの例をつぎに紹介したいと思ひま
す。一つは適塾で緒方の三蔵といわれたという伊藤慎蔵（長州出
永二年）です。慎蔵は後に越前大野藩に招かれ、その蘭学をお

こした人物で、大野藩明倫館蘭学教授として七年間も活躍したの
です。福井藩士である橋本左内と知り合つたかどうかは今断定で
きませんが、ほとんど同じころの適塾々生であり、両者相近い
ものと推測されます。この慎蔵の著書に「鵬風新話（附録）
（緒方章公裁闕・安政）（伊藤慎君独訳・四年）」があります。これは一種の海洋・航海学の
紹介解説ですが、その論文の文章体はつぎのようなものです（対
話形式になつてゐるのです）。

○第二回（十七丁ウー十八丁オ）

横八 そうじゃ。人が輪になつて吹く風がある。といふ事を承
知さへしたなら。誠によいたやすい言葉じやが。わしが一度あ
る遊歴人を船へ乗せた時。其人がいつでも月の「シクレス」
義のと言ひをつたけれど。わしハ何の事をいふのやら。ど（切う
もシツカリ合点が行かなんだ）。

正兵衛 まだ其上に「ストルム」の「ウエツト」でハ。此回風
（そち達が知る通りに。只今「シクロ子」と名付けるもの）
が。地球の両半球で。別々の側へ「ロンドグライーエツ」して。
北半球では。時計の指針とあちこちで。右から左へまはりの。
南半球でハ。時計の指針と同じ事で。左から右へまはりの。と
ふ事がわかる。そこで島杯の様な陸地の上でも。やはり赤道
の両側で。あちこちに風が「ロンドローベン」する。

横八 ヨシそれなら後に。をまへがわし共に。其証拠を見せて
下さるまでハ。まづをまへのいはつしやる通りに。（後略）

話しことはまる出しの文章体で本書は一貫しています。ハ据助
内閣文庫蔵本による一

五郎吉Vと人名まで翻案体をとつているところをみれば、明治啓蒙期の外国文学翻訳態度と軌を一にしましょう。「颶風新話」はこれ自体、国語資料となるものですが、一口にいうならかなりこなれた口語体でへじや体・しなんだ(否定)体Vをとつています。指針にさしばりとルビするなど、緒方塾の平易通俗の態度をまもり、おし進めています。論吉のものと大同小異といえましよう。しかし慎蔵は大きな家庭的不幸に見舞われ、また文部大助教という官職につき、学問も理数方面へと志したために、淋しくこの世から去つてしまふ運命となつたわけです(明治十三年他界)。論吉との相違も考えられるわけです。両者の違いはこれまた近代日本の史的展開を考える上で興味ある一事実でしょう。

もう一人は震動雷天僕のことです。彼は適塾の姓名録によりますと、八安政羊歳十月十三日 上州伊勢崎 震動雷天僕Vとあります。天僕は安政四年(一八)十七才の時に大阪に遊ぶということになっていますから、あるいはこのころから適塾に近づいていたかもしれません(一説に安政四年入門説もあります。私もこの方をとりたいと思います)。彼の残したものに「万学摘要」(最終ページに、安政六羊歳八月十四日再造 万延元年四月下旬 浪花小醉山人とみえる)に適塾での蘭学・蘭語学学習の一端がみえています。その中に八物乙蘭度前編／驚蘭麻智加Vなどの名がみえるのです。物乙蘭度はおそらくP. Weiland; Nederduitse Spraakkunst (一八／長崎でも安政六年復刻されてゐる)であり、驚蘭麻智加は(Maatschappij; Grammatica of Nederduitse Spraakkunst (一八／復刻がある)でしよう。両者ともきわめ

て一般的な語学学習書であつたわけです。その他「福翁自伝」や「松香私志」(長身専齋)によれば、上述の外に、Maatschappij; Syntax of Woordvoering der Nederduitse Taal. が用いられたと思われまふ。いずれも箕作院甫などによつて「和蘭文典前編」・「和蘭文典後編成句論」として木板により復刻されています。洪庵はグラマチカとシンタキスが坪井塾で使用されていたのを襲つて、適塾でも初級文典学習に二書を用いたようです。使用の辞書は長崎通詞らの協力による「道訳法爾馬」か「訳鍵」を用いたようです。ところが文典の説明講義がどうおこなわれたかが問題になりました。しかしその前に、文典の講義が長崎の中野柳圃流であつたことが想像されます。それは別論を参照すればわかることですが、宇田川榛齋の子・榕庵も馬場や吉雄に習つてゐるし、それらを見るといわゆる長崎流のデアル体(道訳法爾馬も同様)の訳文をもつてゐるようです(別論八近代語の標章Vを参照。特にそこに利用した小原亨に関する考察をみられたい)。ところで震動雷天僕のものをみますと八Oebstand drolas der Worden ハ「レットルグレイブ」文字ノ一綴リデアルVというような方法・訳文で講義してゐたらしいことがわかります。換言すると、長崎の「道訳法爾馬」の文体と同質のものがここにみられるのです。「道訳法爾馬」の訳語・訳文をはじめ長崎系蘭学の方法や態度は別にくわしく考察、検討したのでその方を参照してほしい(震動雷天僕も長崎遊学を試みている)。しかもこの方法態度はたとえ江戸であつても緒方洪庵の属した、関連をもつたグループの学者には浸透してゐたわけです(「重訂属文錦囊」は吉雄

権之助口述ですが、宇田川榕庵の序をもちます。(八和蘭属文錦
義抄その他Vという小論参照のこと)。

蘭学者としての左内 再び橋本左内に話をもどしましょう。

ここにあらためて確認するまでもありませんが、その後の左内の
活躍ぶりはこうなります。安政元年、出府の後、安政二年七月一
度帰国し、再び同年十一月出府、安政三年六月帰国翌、七月藩学
明道館講究所に出勤、蘭学科掛を命ぜられています。しかし安政
四年八月出府し、ついに蘭学者としての活動を断つてしまうこと
になるのです。したがって二十四才で蘭学者としての左内はいな
くなってしまうのです。以下周知のように勤王の志士として活躍
しますが、小伝によれば安政八六年十月二日下獄。七月処斬。時
年廿六後函送遺骸於郷里(後略)Vと悲運にあうわけです。もし
左内をして、五十の天寿を与えたならば、あるいは、志士として
でなく蘭学者として、啓蒙学者としての道を歩んだならば、どん
なになっていたことでしょうか。惜しみても余りあるものといわ
ねばなりません。——それはさておき、では左内に蘭学者として
どのような業績がうかがえるでしょうか。

左内の出府は山口氏の言われるように、あくまでより深く蘭語
学をきわめることだったわけですから、そこで左内の蘭学の教養を示
すものとして、「嘉永七甲寅負笈東行会計簿」に記されている蘭
学書を示しておきたいと思います。

外科収功(大槻玄幹(文化十)・舎密開票(宇田川榕庵(天保
八年)・氣海觀瀾(青地林宗(文政)・濟世備考(杉田成卿(嘉永
三年)・幼

々精義(堀内素堂(天保十)・依百薬性(青地林宗(文政)・昆
斯(書簡中に)・原病論(未詳)・越原実幾(未詳)・電気關係
(もある)・外科必読(箕作阮甫(嘉永)・外科要方・医療正始(伊東玄朴(天
保六年)・観象図説(吉雄常三(安政)・理学入門(信夫古作蔵
政五年)・本草名疏(伊藤圭介(文政)・植学啓原(宇
田川榕庵(天保四年)・墨池必携(未詳)・名物考(宇田川榛齋、緒
方洪庵も関係している)・名医彙講(箕作阮甫(天保)・治類篇・
火藥全書

医師としてのものだけでなく、蘭学一般、特に理化学方面のあ
ることが注目されます。さらに「丙辰日記(安政三年)につぎ
のようなローマ字表記がみられます。

拾七gita 組蓋磁器 廿六tuboi 帶地一 二歩sgita

二朱 青書箱

sgita, tuboi は、杉田(成卿)・坪井(信良・信道)と思われ
ますが、左内が日本式ローマ字を日常生活にもちこんでいること
は興味がかかりますし、その蘭学熱がわかりましよう。安政五年
十二月二十五日の中根雪江宛書簡で八拜啓。地図訳、別紙丈は相
済申候。然る処原本は獨乙本にて、国言和蘭とは頗る相違致居、
之を和蘭之音韻に、直し読候に、大分手間取、初之了簡とは大に
消光に相成申候(後略)Vと述べているほど語学に興味と熱をは
らっているさまがわかります(友人・市川齋宮が、わが国ドイツ

語学の先覚者ですから、あるいは彼からドイツ語をききかじつたとも考えられます。しかしこれは私自身の経験でもありますが、ドイツ語→オランダ語が存外うまくゆかず、左内の当惑した様子もわかります。しかし彼の語学へのアプローチをこの一事でも認めていいと思います。さてこのへんで、左内翻訳の訳文を検討してみましよう。以上の考察でわかりますように、左内はせいぜい安政四年八月（三度江戸に出た時）まで実際にオランダ語の原書読みに身をおいていたと思われまふ。そこで安政三年四月ごろと推定されている「治鉄学」の訳文をつぎに示して、翻訳方法・態度を検討してみましよう。

○蘭書治鉄学の訳文 ○友人佐々木長淳の囑に応じたもの。但佐々木より蘭書した部分もありといひます。

△グレースキットギートエーゼル

○最初ノコト二種ノ細カナル粒ノ混ジモノデアル。夫ノ内ニハ、時トシテハ灰色、時トシテハ白色ガ過度ヲ持ツ所ノ者ナリ。其事ヲ人ガ灰色ニ付テハ白点ヲ以テ、或ハ白キ色ニ、灰色ヲ以テ知り分ケ得ル処ノ者ナリ。○龜鉄ノ二ツノ種類ガ己ヲ稀硫酸（緑ハ一分水五分ノモノ）及ヒ塩酸ノ内デ、炭素ヲ含ンデ、甚ダ快ヨカラズ香フタル水素瓦斯ノ發生ノ間ニ溶解スル。強ク薄メタル硝酸。（硝石製ニ水ヲ加ヘタルモノ）ニ於テハ、カレガ瓦斯ノ發出ナシニ消散スル。而シテ夫ニ沿テハ全キ炭素ノ位ガ残ル。○灰鉄ガ鉍ノ溶解ニ由テ得ラルル。

△エーゼルヒユツテン之ペールキンダ

（全集本・一五六ページ）

○大切ナル鉄鉍ガ磁石デアル。赤キ鉄デアル、棕色鉄及ヒスバート（ホタル石ノ類）鉄デアル。併シ夫ラハ醇粋デハナク、却テ異状ノモノヲ以テ、混ジテ頭ハル、処ノ者ナリ。多ク通例ノ混ジモノガ、珪土、酸、磷酸、石灰土、苦土、半酸、満俺、及ビ白堊土、夫ニ沿テハ、時トシテハ未ダ硫黄ガ来ル処ノ者ナリ。若モ夫ガ共ニ頭ハレテアルトキノ硫黄坑ヨリ生ジタ処デハ、硫黄ガ来ル処ノ者ナリ。

△鑛坭（ルツボ）

○尤モ名高キ種類ガ「イギリス」ノデアル、夫ハ鋼ノ、トカシマデニ用ヒラル、処ノ「イギリス」ノデアル「イブセル」^{名地}ノ或ハ「パツサウエル」^{名地}ノ及ビ「ヘツシ」^{名地}ノ鑛坭デアル。「イギリス」ノガ一部ノ火ニ堪ユベキ^{ケレアイル}亜土、四分ノ一ノ「ガラヒート」及ビ四分一「コックス」（蒸溜石炭）未カラ組立ラレテアル炭ヲ含ミタル成分ガ焼ル間ダニ、鑛坭ガ大ナル際間^{ナリ}ヲ得ル。夫ニ由テ彼ガ破ルコトナク、一ノ強キ寒熱ノ變化ヲ堪ヘ能フ処ノ者ナリ。○「パツサウエル」ノ鑛坭ガ、二分ノ「ガラヒート」ヲ以テ精密混和シタル一部ノ亜土カラ成立ツ。風ニ乾カサレタ処デ、彼ガ一ノシメリタル石ヲ以テナメラカニコスラレ、ソウシテツヨク乾カサレル。○カレノナメラカナル表面^{伊ノ内}ヲ云、ノ内部ノ訳カラシテ、カレガ取ワケ金屬ノ（則貴キ金屬）ノ解カシニマデ適當シテアル。外部ニ「ガラヒート」ガ使用ニ沿テ焚ル。○「ヘツシ」ノ鑛坭ガ「ケウルヘツセン」^{名地}ニオキテノ「コロツサル、メロデ」ト云フ処ニテ、亜土ト及ビ砂ノ和物カラ拵ヘラル、ソウシ

テ十分ニ焼カルル。人ガ精細ニ亜土ノ内ニアラワレタル「ズ
ワーフルキイスニイレン」ヲ遠ザケル。夫ニ由テ鑛坵ガ火ノ
内ニテ穴ヲ得ル処ノ者ナリ。此鑛坵ガ最も多クトカス「マデ
ニ用ヒラル」。彼ガ甚ダ火ニタヌベクアル、然レドモ寒熱ノ
変化ヲ破ルコトナシニ、タヘハ能ハヌ。(一六四ページ)

右の訳文でわかるように「 Δ デアル \vee 」というデアル体のみえる
ことが注意されます。これは私が「近代語の標章 \vee 」で論じた蘭学
の翻訳によって生じた訳文体であるということができます。それ
らと同質のものであるわけです。デアル体が適塾でおこなわれて
おり、もっぱら師弟相伝の態勢で蘭語学々習がおこなわれたので
すから——古代の博士点のように——、そのまま受けつがれてい
つたのも当然でしょう。

デアル体が長崎を出発点としておこなわれ、蘭語学の普及発展
にともなつて、同じ文典・例文・訳文をもつて学習されていつた
のですから、「 Δ デアル」というような翻訳文体が橋本左内にもみら
れるのは、これまたすこぶる自然です。改めてデアル体の史的考
察を示しませんが、安政にはいると江戸でも福井でもデアル体の
訳文が一つの範例文としてのスタイルに認められてくるわけ
です。誇張すると全国同一の文体としてデアルが正座につくの
です。

△尤も名高キ種類ガ「イギリス」ノデアル／併シナガラ稀薄ニ
流動スベクアル／大切ナル鉄鉾ガ磁石デアル／夫故タヤスク流動
スベキ鉾、及「スラツケン」カヲ得ルデアラフ \vee など他のものにも
多くみられる訳文体であつて、左内独自のものではありませ

ん。

左内が訳文にデアル体をとっている理由は上で私があげたよう
に直接には適塾で学習したからであり、ひろく蘭語学の伝統と方
法によつて学習したからです。たゞここで今まで私の調査した限
りでは、安政二年～五年にかけてデアル体の訳文の輩出している
意味をもう一度考えたいと思います。これは推測にすぎません
が、これまで辞書として「訳鍵」や「道訳法爾馬」が用いられて
いたわけですが、前者はあまり利用されず、蘭語学学習では「道
訳法爾馬」の方が用いられたようです(適塾のことは論吉の
「福翁自伝」によつてうかがわれます)。洪庵の師坪井信道も「道
訳法爾馬」を書写している(早大蔵本)ほどです。佐久間象山
がこれを出版しようと幕府にかけてあつた話は有名です。「道訳
法爾馬」もまたデアル体で一貫しているのですから、これを利用
した時、結果的に訳文にデアル体がおこなわれたと考えられま
す。しかし同書は写本でのみ流布していつたものです。そこで、
安政二年～五年にかけて桂川甫周により「和蘭字彙」が公刊され
た意義は、きわめて大きかつたといわねばなりません。「和蘭字彙」
と「道訳法爾馬」との関係は別論で考察しましたが、ほとんど同
一のものと考えていいわけですから、「和蘭字彙」によつて、「道
訳法爾馬」でおこなわれたデアル体、長崎通詞に淵源をもつデア
ル体の訳文が一般化していつたわけです。「和蘭字彙」の公刊が
デアル体の普及に大きな役割りを演じたと考えられないでしょう
か。どうも上述のように安政期にデアル体の訳文(文典の類)が
続出していつた一つの契機は、ここに求めることができるように

思うのです。

すでにデアル体が翻訳する伝統が、できあがつていつた上に、「和蘭字彙」が公刊されたことは、この方向をさらに一步も二歩もおし進める結果になつたと推定するのは誤りではないと思います。他の私の小論も参照していただきたいのですが、やはりデアル体は長崎で発生し、江戸や大阪に普及しつゝ、ついに全国的になつていつたということができます。その際大切な役割を演じたのは塾であり、師弟相伝・口授の方法でした。しかもそれにさらに加速度を加えていつたのは安政二年から刊行された「和蘭字彙」であろうと思います。左内の訳文はいみじくもこうした歴史の証人という位置と価値をしめてもいるということができましようか。

最後にもうすこし左内の訳文自体を検討しておきましょう。

上であげた訳文は率直にいつて、どれもこれもわかりいいこなれた日本語文ではありません。直訳も直訳、まづたく遂語訳の観をまぬかれません。八若モ夫ガ共ニ顯ハレテアルトキノ硫黄坑ヨリ生ジタ処デハ、硫黄ガ来ル処ノ者ナリVの一例文をとつても、このことは十分うなづかれましよう。関係代名詞の訳出に工夫がたりない故に、文章が一つのまとまりをもたず手こずつてゐるわけです。また代名詞^ニを夫と彼と訳してはいますが、本来そうした主語をもたない日本語ですから、これまたきこえなくないつています。訳出にあたつて助詞のガ・ハの適当な用い方も欠いてゐるようです。あえて言うならば現代中学生が英語を訳す程度のできばえと言うほかりません。しかしよくよく読んでみると、

どうやら全体の意味はつかむことができるように思われます。蘭学をはじめて五年足らずですからまあ致仕方あるまいと思ひます。しかも多忙な中に「安政丙辰(三)日記」の四月七日の条にみえるように八四時より原書校読十五枚半Vと蘭語学習への情熱をもやしているのです。

なお左内の蘭語学習と関連して、その文法学習・知識のあり方を考える一資料を示しておきたいと思ひます。それは八景岳先生手帳Vの一部であつて、たとえばつぎのようなものです。

全文を形容詞に因て略する四法

二三の全文章同一様の動詞を持ば、次文以下之を略す。

数個の全文、一個の主と諸種の動詞を持ち、及の字を用て、相結合せざることを得ざるときは、形容詞とセエンと云動詞を有する文に於て、是動詞を略す。主部或客部ジイウエルケと及びセインなる動詞を具へる註文を要するときには、動詞及び代名詞を略して、単に形容詞を用ゆ。

omdat is

全文の主部を拡張延増する法。百六十三章

第一 形容詞を置く。

第二 一格或二格の実詞を用て詳解す。

第三 間文を用ゆ。

第四 上則を併用す。或は第一と第三と併用し、或は第二と第三を併用す。

所分詞に因て重文を単殺する法六道。

所動詞及セキンなる動詞を有する文章を単殺す

第一 In droefhied veronken, hield zy hare oog en op den grond gevestigd; d. i. zy was en droefhied veronken en hield.

○彼女は悲歎に沈み其目を地の上に据附けて保てりの意。

主部或は客部の註文、關係代名詞、及びセキなる動詞を有する者を單殺す。

第二 Werkame lieden, op hùn onderwerp ingespannen, zyndoorgaans koel voor alles wat daartoe behoert. Voor werkzame lieende, die op hùn onderwerp ingespannen zyn enz, Men Sleepte hen gebonden voort; d. i. die gebonden was.

○勤勉なる人々其役務に服したる時は通常凡て之に附屬せるものに對し冷淡なりの意。

まさしく左内の蘭語学習の一例を如実に語っていることになり
ます。語論のみでなく文章論的説明もみえるところは、上述のよ
うに塾でのグラマチカとシンタクスの学習課程を示すものでもあ
ります。ここには震動雷天僕の残した語学々習の跡と同様のもの
をみてとることができます。おそらく、左内は落校で蘭学を教授
する時にも、こうした方法と態度をとつたことでしょう。ここで
みられる文法術語や理解の方法・態度こそ適塾のさらには蘭学者
一般のゆきついた水準線であつたでしょう。この方面でも左内が
近代的な方向へと一歩ふみ出す態度をとつていつたといふことが
できるのです。

(41・5・15)

註1 論末のハ参考資料についての私記Vを参照。山口宗之はその

「勞作」全集「橋本左内關係史料研究」中のハ嘉永七甲寅負笈東
行會計簿Vの解説で、つぎのようにいわれています。

これより先「嘉永七年（安政元年）二月（三月）左内は、嘉永
二年末から嘉永五年五月に至るまで大阪の緒方洪庵塾（こうい
う呼称はなかつた）に学んだ経歴をもっており、『扶氏經驗遺
訓』『病学通論』『ローセ氏人身究理書』『イスホルシンク氏
理書』などの原書訳書を独力でよみこなし（嘉永四・七・八、
笠原良策宛書翰

ハ改訂版全）、原書筆写のあやまりを正しうるほど上達し（九・
集三一頁V）

（一・同）、すでに氣鋭の蘭学者として成長しつゝあつたので
あるが、父の死により進学を中断せざるを得なかつた。今回は
ぜひと宿願を達し、いまだ満足すべき域に達していない自らの
蘭学々識をさらに深めんがためであつた（中略）緒方塾在学
中の嘉永二年、（中略）純然たる医師であり、蘭学の攻究にいそ
しむ一書生にすぎなかつた（後略）。

2 これは「橋本豊岳全集」のハ一五嘉永四年七月八日 先生よ
り笠原良策へ笠原は福井の一部です。ハ誠に不堪、眩暈二候V
のつぎにハ御一笑可被下候 以上Vとあります。

◆左内の蘭語学々力を考える上でのハ参考資料についての私記V

①山口宗之「橋本左内」（37・2人物叢書）本書に蘭学者として
左内についてハ第二蘭学への沈潜（三五ページ）Vの一項目が

あります。しかし小論でとり扱つたものではありません。左内の
蘭語学について、あるいはその翻訳の実態・方法については何
もふれていません。ただ同書巻末にハ主要参考文献V（単行

本・論文が収集されていて、すこぶる便利です。しかし蘭学者としての左内を考察したものはありません。しかし左内に関するものとも最近の業績として記録しておきたいと思います。

② 滋賀貞「偉大な橋本左内」(武蔵野書院、昭3・11) 同「景岳橋本左内」(同上昭10・10)、後者は前者の増補と考えられます。

両者で大阪・江戸での左内の蘭学修業についてふれておられます。特に後者は左内の語学力Vの小項目で八是迄扶氏経験遭訓、病学通論、ローセ氏人身究理書、イスホルシング氏理化学書等の原書訳書を写したことが伝へられてゐただけで明瞭ならぬ点があつたが、近頃左内が十八才の時郷里の笠原白翁に宛てた九通の書簡に依つて、左内が是等の原書を読するまで進歩してゐたことが明瞭となつた。Vと述べられ、嘉永四年六月五日か九月十三日、七月八日の書簡を引用されています。氏は左内の語学力について左内が蘭訳の原書を十分に読みこなしてゐたことは是に依つて十二分に証することが出来るVと評価されています。(同書四一―四二ページ)

その他左内関係のものは少なくないが、やはり志士としての左内が中心に描かれているようです。でもつとも根本的資料としてとるべきは、つぎのものと私考します。

○橋本左内全集 全景岳会(明治41年6月)

○橋本景岳全集 上・下景岳会(昭和14年9月)

*右の文獻は前書の増補版です

△全集橋本左内関係史料研究山口宗(昭和40・1)

③ 緒方洪庵関係のことを調べる上でつぎの二書を参照しました。

○緒方富雄「緒方洪庵伝」(岩波書店)

○浦上五六「適塾の人々」(新日本圖書KK)(参考) 彼の洋学に対する意見を知る一資料として、つぎの八原案Vをあげておきます。

学問所事件に付先生の布令原案(安政四年四月十二日)

洋学御端立

洋学之義筋合正しく相開候時は、其利夥有^レ之得共、万^一杜撰に相成候時は、其害亦曾^レふへからず。

学校諸役人之事

一 洋学御端立之義、御科目中に論載御座候通、固り奇方異伎御物数寄被^レ成候而の御事にては決而無^レ之、近世西洋大に學術伎芸を研究、殊に数十年戦争止まざりしにより兵科を始、器械を製し、物産を開き候事及度学・算術等に至るまで、頗る実験を尽し且其精功を極め、間々皇国と雖未だ及ばざる所を發明仕候故、彼之長伎を敢て吾皇国の利器を御補足被^レ成、皇国をして益諸邦に勝れ候様に被^レ成度御趣意を奉^レ存候。(中略)先彼の所長を知り候事、第一たるべく候。彼の所長を知り候には、其学芸、伎術を講究候事最も急務たるべく義に付、今般御端立に相成候御義と奉^レ存候。右等の御趣意能々相弁へ、四りに新奇使用を喜び、外国を誇稱して、皇国を卑視致し候様の所行無^レ之様、心得為^レ仕度奉^レ存候事。(後略)。(は私施)

(追註) 天理図書館蔵の一本をみると「和蘭語学原始」は、原本の復刻文字「Eerste beginselen der Nederduitse Spraakkunst 1844」があつて、左内の「リユニメント」(書簡中にみえる「文法原始」と別かと思われまゝ。beginnselenも原始の意です。が後考をまちまゝ)